女学生時代の思い出

中村由子
（会員・弥生町江良）

着物に海老茶の袴をはいて、下駄姿というちょっと風変りなスタイル。これは大正十二年（一九二三）四月大分県立佐伯高等女学校に入学した私達の服装であった。旧上野村川又部落に生れ育った私は、佐伯町中村在の女学校（今の佐伯市役所庁舎）まで、八キロの道程を二時間かかって徒歩通学、今の国道十号線と一一七号線を毎日往復した。デコボコ道を土煙りを浴びながら。

その頃、国道沿いには、まだ人家は少なく、畑木の三差路に二軒、小又橋畔に二軒、番匠橋元に菓子店、百米程離れて小店一軒、更に農家が三・四戸あった。昭和十八年の大洪水で、人家もろとも流失し、辛じて小田部落に引揚げた人もあった。何と言っても私達の最大の難所は鉄橋下の「南無妙法蓮華経」の石碑のある薄暗い場所だった。白木坂の附近には全く人家がなく、昼間通ってさえ無気味で、四方に気を配りながらの歩行であった。真偽の程は知らないが、毛利藩時代罪人を打首や鋸引にしたという伝説があり、不審火がとぶとも言われていた。夕暮近くになると、人通りは絶える。それで待ち合せたように、坂の手前で暗々の中に二人か三人になることが多かった。ここに来ると大声で話すか、静かになるか、どちらかだった。自分の履物の音さえ怖かった。だが別に恐しい目にあった事は、一度もなかった。

坂を下ると昔風な貫録のあるタビヤという建物があった。この建物は今も昔とあまり変りないようだ。藩政時代は木炭の集積所として隆盛を極めたらしいが、その事は史家にお任せすることにして先に進もう。

上岡駅には駅のあるおかげで、一軒の宿屋、タバコ屋、自転車の小店と、農家が四、五戸あった。一本松も、僅かな軒並みで、下校途中、こんなこともあった。

近所の荷馬車引のおじさんに出会った。「あんた達、二人共馬車に乗らんか」と言われ、「お願いします」と、そのまま後部に後向きに乗せてもらった。ちょうど白木トンネルの入口まで来た下り列車の警笛が金切音で鳴り響くと同時に、馬が驚き立上るが早いか暴走、「アッ」と思った瞬間、二人は馬車から振り落された。あたりを見廻したが、別に人影はなく、安心し

て二人で労りあいながら起き上った時、おじさんが心配して後戻り「怪我はなかったか」と尋ねられ恐縮したことがあった。これが今の交通渋滞の中だったらと思うと身震いがする。その後、再び馬車に乗ることはなかった。

一本松からドケヤ道を行くと、川幅は広く清流に渡し舟が浮び、まるで一幅の絵のような風景であった。この舟は、竜護寺部落への貴重な足で、羽明山竜護寺は栂牟礼城主佐伯氏の菩提寺でありまた安産の神としてお詣りも多かった。瓦焼工場があったが、今は何一つ当時を物語るものはない。この上流から金欄橋方面に灌漑用水が流れ、水路の土堤一五〇米程の間に、和蝋の原料となるハゼの木が植えてあり、その大木にはギッシリと小粒の実がついていた。ハゼまけをするというこの木の実は、光沢の良い褐色で食べてみたいようにあった。今でも化粧品・文房具その他用途は広いが、コスト高のため代用品が考案されたことから、はぜの利用は激減し、現在は一本もない。

本道に出ると、狭い道幅ではあったが、自動車は通らず、ただ中学生が二人か三人づつ自転車で通り、女学生と準教員養成所通いの女性二人は徒歩であった。通行人は割合いに少く、佐伯町への通勤者も稀で、道路の混雑は殆んどなかった。金欄橋までは、私達もメモを見たり、本を読んだり、考えながらの長閑(のどか)な通学風景だった。ハッと思って立止まると、相手は電柱で「なあんだ！」と微苦笑したこともある。

さて、藤原津留まで来ると、道路の⅓ぐらいまでは家が並んでいたが（所々に空地もあった）桝形までは、広い田んぼで、田んぼの真中に一直線の道路が走っていた。

客馬車に逢う。その頃は、何といっても人力車と並んで陸上交通の花形だ。馬車は、御者が箱の外側の前方に腰掛け、馬にムチを当てながら「ハイヨー!! ハイヨー!!」の掛け声で走らせる。客は四、五人乗りだった。料金は、町まで三十銭位ではなかったかと思う。乗る人は、お金持か、病人か、急用の人位で、一般には、縁遠い存在であった。惜しいことに、私は一度も乗ったことがなかった。一般人が佐伯町へ出ることは、盆・正月の買物ぐらいで、特別の人以外は、町とは縁のない暮しであった。

この頃の盆・正月の進物は、田舎では、タオル、足袋、石鹸、履物、腰巻が主で、今のように多種類の高級品が、広範囲に使われることはなかった。

西谷、今の角石は、毛利藩政時代には三勤交代の船着場だったそうだ。ここも河幅は広く、水面は向岸まで小波(さざなみ)をたて汚れを知らなかった。

山際に客馬車の駐車場（トタンぶき）があり、川上の一番端の小店では、毎朝色紙饅頭が、上部にチョッピリ紅をつけ、おいしそうにポヤ！ポヤ！と湯気をたてながら硝子棚の中でお客を待っていた。私も欲しかったのか、毎朝見落したことはなかった。

船頭町河岸は堅田・木立・浦部方面からの人々で賑わってい

た。船頭町は佐伯の繁華街で、大売出しの時はあの狭い道を中に、双方よりメガホンで商戦合戦が繰展げられ、客寄せの為まるで子供のような口論さえあった。

佐伯のシンボル、城山は、文豪国木田独歩や史家により、一躍有名になったが、六十年前は余り広く知られてないようだった。と申し上げるとお叱りを受けるかもしれないが、これは私の無関心だった故かもしれない。

学校ではプールがなく、水泳には、時折住吉浜に行った。向岸近くは深い渕で、広い川幅は綺麗な流れで、多数の泳者には格好な場であった。川端に大きな倉庫があり、何の倉庫か思い出せないが、多分木炭倉庫ではなかったかと思う。ここが全校生徒の更衣場となった。（二七〇人程で、休泳するひとも多く二〇〇人余り。）終了後は、最短距離を規律正しく、堂々と帰校した。大正十四年には、大入島に遠泳したが、精鋭揃の二十五名程であった。

八月になると湾内に停泊中の、軍艦の見学と慰問に行った。私の記憶では戦艦金剛だった。軍国日本のシンボルで、厳然とした水兵さんの規律行動に驚いた。とはいえ男子ばかりの中に訪れた女子学生とあって、水兵さんのお顔は、どの顔もどの顔も喜色満面、はちきれんばかりの歓迎振りだった。花束を贈り、独唱・合唱をお目にかけ、楽しい一日を過し良い勉強にもなった。

二年生になると、私達三人組は（加藤・橋迫・工藤）待望の自転車通学に切替えた。まだ佐伯町では女自転車乗りは一人もなく、女性自転車乗りの第一号となった。その頃、中学生・女学生は佐伯のエリートとして羨望の的であった。道行く人々は、髪を長く伸し颯爽たる自転車姿を物珍らしく見守った。本町を通ると、奥様連がとび出て手を振り歓迎してくれた。しかし自転車で通学が楽になったのも一ケ月余りで、学校当局より「不妊の恐れがある」と乗車停止となり、やっと秋風の立ち始める頃、県より許可が出て再び自転車の登場となった。

当時乗物というと、佐伯駅前に人力車が十台程待機して、駅の客を拾った。また地方では、お医者様は殆んど車夫をかかえ人力車を常用していた。

もう一つ忘れられない事は、私達の修学旅行が、前例を破って東京まで延長されたことである。大正十五年十月十三日午前十時頃列車は東京駅についた。初めて見る首都に驚き、キョロキョロしていると、旧佐伯藩主毛利高範子爵が、緋の袴をはいたお嬢さん三人を伴いお出迎え下さった。初めてお目にかかった高貴な方だが、懐しく親しみさえ感じた。丸の内ビルで昼食会を催され、私達一行六十名は、初めての洋食にマナーも知らず、ただ、たじたじしており、毛利様方の食事法を真似しながらやっと食事はすんだものの、食事中お行儀良くしてと思い、ナイフとフォークをきれいに並べて置いた為、給仕さんに下げられた料理もあり、お腹は満たされなかった。初めに出たフィンガーボールの水を一度に飲んでしまうやら失敗の連続で、ま

たある夜は歓送会の夕食会に毛利邸に招かれ、名物のおそばを美味しく御馳走になり、記念撮影に記念品まで戴き、郷土のお話で和やかな夜を過し、感謝しながら宿舎の希望荘に引きあげホッと胸をなでおろした。

その後も十数年間、修学旅行の都度歓待を受けたそうで、旧佐伯藩主としての目に見えぬ繋りが、お互いの心の底にあるのではないだろうか。その後五人のお嬢さんは、近衛公爵家、黒田子爵家等々にそれぞれお輿入れになられた。

あの日より幾十星霜、今静かに過ぎし日々に思いを馳せる時、余りにも遠く、二度と再現できない故郷のことどもを、声の限りに呼んでみたい。

「オ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ーイ!!」

與謝野晶子の歌碑

歌碑との出遭い

河野百百代
（会員・弥生町江良）

犬飼石仏　與謝野晶子の歌碑

豊肥線の犬飼駅から南に四粁、渡無瀬の里に犬飼石仏を尋ねた。この犬飼石仏は大野川の本流に面した丘陵の中腹にあった。

先ず目についたのが見上げるばかりの岩壁に「南無大師遍照金剛」と彫み込まれた八大文字である。堂内には凝灰岩の大岩壁の岩窟に不動明王座像（三・七六㍍）を中尊として、左に矜羯羅童子、右に制吒迦童子を脇侍としている。

三尊とも凝灰岩の粗面を利用した荒彫風の像で、地方的な素朴さの中にたくましい彫法が感じられた。また両足の裏を見せて結跏趺座しているのが珍らしい。龕や裳に淡い朱の色が残っていて美しい。制作年代は鎌倉時代と推定する説が多